

梅雨期における農作物被害防止技術対策等について

令和7年（2025年）5月22日

熊本県農業技術課

農業革新支援センター

< 普通作（水稲） >

<事前対策>

1 育苗期

（1）排水

降雨が続く場合は可能なかぎり苗床の排水に努める。

（2）病虫害防除

箱施薬剤について、大雨・長雨による薬剤の流亡・流出を防ぐため、降雨前の苗代における施用は控える。

2 移植直後～活着期・分けつ期

（1）排水

降雨が続く場合は可能な限り圃場の排水に努める。

<事後対策>

1 育苗期

（1）排水後

苗が冠水し葉身に泥等が付着している場合には、水の引き際あるいは排水後に振り落すか、洗い流す。

苗床が排水しきれない場合、そのままにしておくと根腐れやルートマットの形成が阻害される原因となる。置床後まもなく、移動が可能であれば、苗箱を一旦引き上げる。

長雨から一転して晴天が続く場合は、寒冷紗等で遮光し、脱水による枯死を防ぐ。

萎凋を防止するため、箱当たり窒素成分 0.5g 程度の追肥を行って発根を促進させる。

（2）病虫害防除

白葉枯病、いもち病が発生しやすいので、排水後に薬剤施用を行う。

なお、軟弱徒長苗では薬害が出やすいので、箱施薬剤の施用を控える。

2 移植後～活着期

（1）冠水期間が2～3日以内の場合

排水後速やかに清水と入れ替え、その後いったん落水して根に酸素を供給し、発根を促した後、浅水管理とする。

（2）冠水期間が4～5日以上の場合

排水後、速やかに清水と入れ替える。その後以下の処置を行う。

上位の葉が腐敗し、引っ張ると抵抗なく抜ける場合は、直ちに苗の手配を行い、植え替えを行う。

緑色の葉が一枚でも残っており葉身を引っ張っても抜けない場合は、そのまま落水して生育の回復（新葉発生）を待つ。

(3) 病虫害防除

冠水後は病虫害が急激に増加する場合があるので、発生に注意をはらい適期防除に努める。

スクミリングガイは、貝・卵塊が見られたら直ちに捕殺する。その後、スクミリングガイに登録のある薬剤を散布する。

白葉枯病、いもち病は、稲の生育が回復してから薬剤を処理する。

(4) 雑草防除

冠水被害を受けた圃場では、生育が回復（最低2葉程度の新葉が展開）した後に除草剤を散布する。

初期剤の処理を予定したが降雨により処理が遅延し、その間に雑草の生育が進むなど、処理適期を逃した場合は、中期剤等への切り替えを考慮する。

薬害の発生を防ぐため、使用基準に定められた散布方法を守って散布する。また、深水にすると薬害が発生しやすいので注意する。

シメトリン等の成分を含むトリアジン系除草剤は、冠水時に薬害が発生しやすいため使用には注意する。

3 分けつ初期

(1) 排水後速やかに清水と入れ替えた後、分けつを促進するため、浅水管理を行う。

(2) 1株当たりの茎数が20本前後に達した後、茎の充実と徒長を抑制するため、軽めの中干しを実施する。

(3) 中干し後は浅めの間断かん水とし、徒長を抑制する。

< 普通作（麦類） >

<事前対策>

降雨が続く場合は、排水口や圃場周囲の作溝を見直し、スムーズに排水が行われるようにする。

<事後対策>

収穫前の圃場に水が溜まっている場合は、作溝等を見直し、圃場外排水に努める。また、風雨で倒伏やなびきが見られるところでは、成熟した麦が長時間水に浸かると穂発芽する恐れがあるので、可能な限り穂が浸からないように引き起こす。

＜ 野 菜 ＞

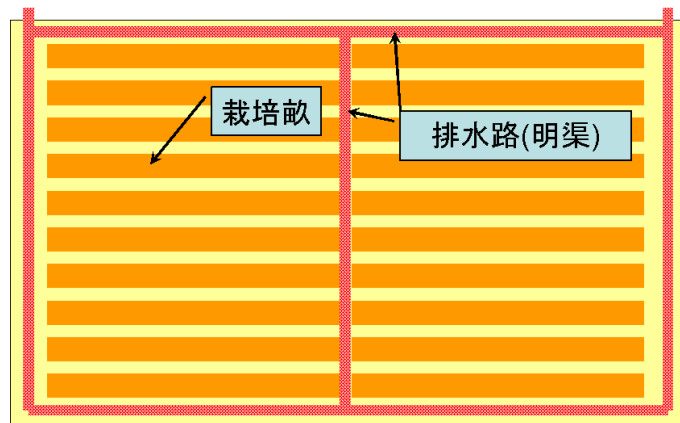
＜事前対策＞

共通事項

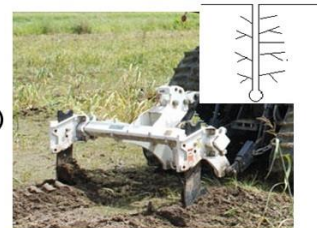
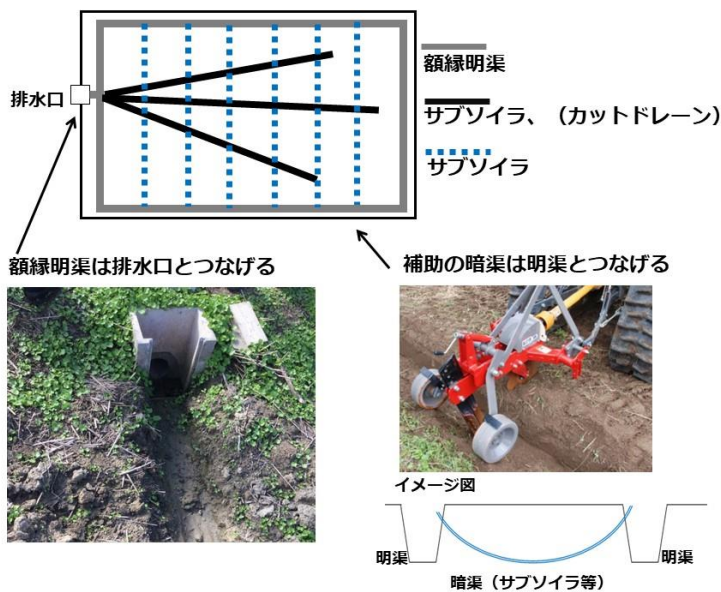
排水経路を点検し、畝溝や排水溝、明渠、暗渠等の排水機能を改善しておく。併せて、除草等も実施して、圃場周囲の環境改善を行っておく。また、圃場への雨水浸入に備えて、ポンプ等を準備し強制的に排水できるよう準備しておく。



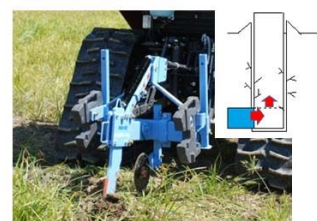
【水田圃場は額縁明渠を設ける】



【赤線部分に排水路（明渠）を設置した例】
（圃場長辺を分断するように明渠を設置）



サブソイラ
ほ場の耕盤の破碎や簡易な暗渠を施工する機械



カットドレーン
地中に通水用の空洞を成形する機械、暗渠として利用

【排水対策の施工例とポイント】



【ハウス周辺の排水溝】

(マルチ展張で溝の崩れ・雑草・浸水防止)



【ハウス内への浸入防止対策】

施設栽培

浸水によるオイルタンクの浮き上がり転倒、重油の流出を防止するため、固定状況を確認し、不良箇所は固定する。防油堤に溜まった雨水を抜き、止水栓を閉めておく。また、降雨時は管理・補修が難しくなるため被覆資材、支柱、防虫ネット等の点検を行っておく。併せてハウス周辺に排水溝を設置する。

<事後対策>

共通事項

1 圃場の排水対策

- (1) 圃場内の水は最優先で圃場外への排水に努める。
- (2) 暗渠が施工されていても排水不良な場合は、縦穴暗渠を追加して排水する。

冠水害は地下部ばかりでなく、地上部も水中に浸る結果として起こる障害であり、野菜の種類によってその抵抗力は異なる。

【作物別での冠水害抵抗力】

5日間の冠水に耐えたもの	サトイモ、ヤマイモ、シソ等
2～3日の冠水に耐えたもの	ラッカセイ、ニラ等
2日の冠水に耐えたもの	ネギ、ラッキョウ、ショウガ等
1日の冠水に耐えたもの	ダイズ、ゴボウ、ナス、セルリー、アスパラガス等
7～8時間以上の冠水で被害の著しいもの	インゲン、ホウレンソウ、スイカ、メロン、カボチャ、タマネギ、キュウリ、キャベツ、トマト、イチゴ等

(H27 農業気象災害に対する農作物技術対策資料から引用)

2 冠水の事後対策

- (1) 1回目の農薬散布時は、泥水等で汚れた作物の洗浄を兼ねて実施する。時期、種類、散布量等を慎重に検討する。雨が上がったらできるだけ早く殺菌剤（おもに細菌性病害の予防剤）を規定濃度の低濃度域で散布する。
- (2) 冠水・滞水した場合は、土壌中の肥料分の流亡が懸念される。野菜類では、特に窒素などの欠乏等が危惧されるため、葉面散布やかん注により生育の回復を促進する。
- (3) マルチングした畝間に滞水した場合には、過湿を避けるためマルチを上げて土壌を乾かし、通気性を高める。

(4) 土砂の流出により、根が露出したり、畝間が雨で叩かれて土が固く締まった圃場では、根元がグラつかないように中耕や土寄せを行う。

3 激しい冠水や浸水によって、現行作物の栽培継続が困難と判断された場合は、可能な限り早く、蒔き直しを決定するか他品目への転換を判断することも必要である。

施設栽培（雨除けハウス栽培含む）

1 ナス科作物（トマト・ミニトマト・ナス・ピーマン等）

育苗期から定植直後にかけての苗齢が若い場合は、苗立枯病や疫病等が発生しやすいので予防散布に努める。収穫中のトマト類は裂果の発生が予想されるので、圃場の排水対策も入念に行う。

2 ウリ科作物(キュウリ・ニガウリ等)

生育途中での草勢低下や衰弱がみられる場合には、果実の“若採り”や摘果(花)を行う。併せて、草勢をみながらこまめな追肥を行い生育の回復を図る。

3 アスパラガス

冠水により土壌養分が流亡すると草勢の低下を生じやすいので、追肥や葉面散布を行い回復に努める。併せて根の活性低下の改善のため、発根剤や酸素供給剤を処理する。

ハウス内の過湿による病害の発生が懸念されるので、茎枯病を中心に予防散布を行う。

摘心時期の株は、天気の良い日に早めに摘心を行う。

4 葉菜類

雨除け栽培のホウレンソウ・チンゲンサイ・ミズナ等では、天候回復後の強日射によって葉焼けや生育障害（チップバーン等）の発生が懸念されるので、寒冷紗等で遮光する等の対策を講じる。

5 病虫害対策

(1) ハウス内の換気と排水に努め、過湿にならないようにするとともに、通風・採光を良くし、発病した茎葉・果実は速やかに除去する。

(2) 病害が多発してからの防除は困難になるので予防防除を行う。ただし、薬剤散布の濃度は、適用濃度範囲の低濃度で散布する。特に晴天時の散布はハウス内が高温にならないように換気を十分に行う（防除薬剤及び方法等については、県または地域の防除基準に従う）。

露地栽培

1 土壌流亡で崩れた畝は、早急に補修・整畝を実施する。

2 排水を図り1～2日を経て土壌状態が良くなったら、窒素を主体とした少量の追肥や葉面散布を行い、草勢の回復維持に努める。

3 汚泥土をかぶった茎葉は早急に洗浄するとともに、被害葉・古葉・損傷葉は除去し、通風性を高める。

4 中耕・培土によって土壌の通気性を促進して根の発育・草勢回復を図る。

5 病害が多発してからの防除は困難となるので予防的に防除を行う。降雨が続く場合は、雨の合間を見て（散布後3時間以上を目安として天候の回復が見込まれる場合）薬剤防除を実施する。

< 果 樹 >

<事前対策>

共通事項

- 1 大雨により排水溝の氾濫、斜面の崩落、樹体の倒伏や損傷等の災害に備え、土のう、防水シート、コモ、杭、樹体固定用の支柱等を準備しておく。
- 2 表土の流亡や斜面の崩落防止のため、刈草・除草剤散布は見合わせて、梅雨明け後に行う。
- 3 既存の排水溝については、土砂上げ等点検整備しておく。
- 4 排水不良園では根腐れや根の活性が低下するので、雨水の速やかな排水のため園内外に必要な応じて排水溝や畦溝を整備しておく。
- 5 温州ミカンのシートマルチ栽培園では園外への排水量の増加による土砂崩れや石垣の崩壊が起こりやすい。また、新植や改植、作業道の導入などにより新規に造成した園地でも土砂崩壊などが懸念される。これらの園地・地域では周辺地域の防災への配慮、災害の未然防止のため、排水路、排水溝の整備・点検を必ず行う。また、裸地状態の傾斜地では、防水シートで保護するなど対策を行う。

<事後対策>

共通事項

- 1 園内に水溜まりができる場所は、早急に排水し、根腐れを防止する。
- 2 石垣や法面の崩れた場所は、防水シートで覆うとともに、崩壊が更に拡大しないように土嚢や杭によって補修、補強を行う。
- 3 排水溝や土管、溜ますを点検し、落ち葉や枝、土砂を取り除き、排水を促す。
- 4 排水溝の合流点や流れ落ちる場所では、水が溢れ、水圧による崩落等が発生するので、土のうや防水シート等で補強する。
- 5 大雨により土砂崩れや土砂の園内流入によって樹体が埋没・深植の状態になった場合は、速やかに土砂の排除を行う。
- 6 倒伏樹は早急に引き起こし、支柱等で固定する。
- 7 表土が流亡した園では、客土及び敷き草・敷きワラ行い、根群の保護に努める。
- 8 病害虫対策
雨や強風による傷口から感染する病害、湿り気を好む害虫の発生が多くなるため、降雨が続く前に時期を逃さないように予防的防除を実施する。

- | | | |
|-----|--------|-------------------------|
| (1) | ナ シ | 黒星病、輪紋病、黒斑病 |
| (2) | モモ・スモモ | 灰星病、黒星病、せん孔細菌病（スモモ 黒斑病） |
| (3) | ウメ | 黒星病、かいよう病 |
| (4) | カ キ | 炭疽病、落葉病 |
| (5) | カンキツ | 黒点病、かいよう病、マイマイ類 |

< 花 き >

<事前対策>

共通事項

冠水・滞水した場合、土壌中の酸素濃度低下による根腐れや、軟腐病、疫病、センチュウ類等土壌伝染性病害虫の侵入が起こりやすい。このため、予め排水経路を点検し、畝溝や排水溝、明渠、暗渠等の排水機能を改善しておく。また、ポンプ等を準備し強制的に排水できるよう対策をとっておく。

施設栽培

浸水によるオイルタンクの浮き上がり転倒防止のため、固定状況を確認し重油の流出を防止する。防油堤に溜まった雨水を抜き止水栓を閉めておく。また、降雨時は管理・補修が難しくなるため被覆資材、支柱、防虫ネット等栽培施設の点検を行っておく。

露地栽培

降雨が続く場合、雨の合間を見て(散布後3時間以上を目安として天候の回復が見込まれる場合) 薬剤散布を行う。なお、日照不足により茎葉が軟弱に生育しているため高温時の農薬散布を避ける。

<事後対策>

共通事項

- 1 冠水後、施設内の排水が進まない場合は、ポンプ等を使って強制的に排水を行う。
- 2 停滞水排水後、根が傷んでいる場合が多いため、天候回復後の強日射により上位葉の葉焼け、萎れが発生しやすい。草勢回復まで晴天時に寒冷紗等を被覆する。
- 3 土壌が過湿状態となっているため、マルチの裾を上げ、土壌を乾燥させ根群の発達を促す。また、土壌侵食・固化、根の露出、肥料の流亡がみられる場合は、圃場が適湿になるのを待って、根の発達と草勢の回復を促すため中耕、追肥、土寄せを行う。
- 4 冠水・停滞水等で茎葉に付着した泥は、乾いて固着する前に圧力を落とした動噴を用い早急に真水で洗い流す。さらに、病害が多発してからの防除は困難になるので、傷んだ葉等を除去し通風を良くした後に予防防除を行う。
- 5 次作の準備時、土壌が過湿状態で耕耘すると、練り込み等により土壌構造が崩れるため、水分状態が落ち着いた後に整地・施肥・畦立て等を行う。
- 6 倒伏した株は早急に引き起こし、茎や花穂の曲がりやを防止する。なお、出荷に当たっては選別を厳密に行い、花腐れ、葉の黄化(むれ)のないものを出荷する。
- 7 多湿・雨滴により病害の多発が懸念されるので、圃場を観察し初期防除を徹底する。
- 8 冠水した機械類は、完全に乾燥してから通電を行う。

施設栽培

- 1 ハウスでは、日照不足による軟弱徒長や灰色かび病等の病害が発生し易いため、サイド、谷部、妻部等の開口部を可能な限り開け、換気を十分に行うとともに循環扇等を利用し空気の淀みをなくす。
ただし、根傷みを起こしている場合は、萎凋を避けるため風が直接当たらないようネット等を利用し和らげる。

2 トルコギキョウ

- (1) 斑点病、灰色かび病等の病害については、多発してからの防除が困難であるため予防防除を行う。発病した場合は抜き取り処分する。
- (2) 収穫前の花で冠水したものは、傷んでいる場合があるため状態によっては出荷を停止する。
- (3) 育苗中の苗で、育苗トレイを地面に直置きしている場合は、培土の過湿状態を解消するため、パイプ等の上にトレイを置き、通風を図る。また、病気の発生を抑えるため殺菌剤を散布する。
- (4) 植え替えが必要な場合は、定植時期に合わせた早晩性を考慮し、苗の手配を早急に行う。

3 キ ク

- (1) 日照不足時の採穂は、挿し芽時の腐敗・発根不良の原因となるので、2～3日以上的好天が続いた後採穂する。
- (2) キクは、栄養成長期に酸素不足により根の活性が低下しやすい。湛水3日で65%、6日で89%低下する（香川農試）。
耐水性調査では、12時間浸水で2%、36時間で60%、2昼夜浸水で99%枯死する場合がある（長野園試）。水田よりも湛水前に水分の少ない条件の畑作で被害が大きくなる傾向にある。また、水が泥濁している場合被害が出やすいので速やかに排水を行う。

露地栽培

- 1 土壌流亡で崩れた畝は、早急に補修・整畝を実施する。
- 2 排水を図り1～2日を経て土壌状態が良くなったら、葉面散布や追肥を行い、草勢の回復維持に努める。
- 3 汚泥土をかぶった茎葉は早急に洗浄するとともに、被害葉・古葉・損傷葉は除去し、通風性を高める。
- 4 中耕・培土によって土壌の通気性を促進して根の発育・草勢回復を図る。

< 茶 >

<事前対策>

1 茶園管理

- (1) 長雨・大雨で土砂の流入が予測される茶園においては、茶園の周囲に溝を掘って、濁水の流れ込みを防ぐ。
- (2) 圃場に亀裂、地割れ等がある場合は、亀裂が見られない場所でも降雨により地盤が緩み、がけ崩れの恐れがあるため、安全を確認して作業を行う。特に、大型機械の乗り入れにあたっては十分に安全を確認すること。
- (3) 病害の感染しやすい条件となるため、降雨の合間に、芽の生育ステージに合わせ、殺菌剤を散布する。また、薬剤の選択にあたっては、予防効果及び治療効果を考慮すること。なお、摘採を行う場合は、摘採前使用日数に留意する。

2 製茶工場

- (1) 雨が降り続くと空中湿度が高くなり、製茶機械内部にカビが生えやすくなるため、機械掃除の時は、茶殻を残さないように注意し、機械の乾燥を十分に行う。
- (2) 大雨により雨漏り、浸水等の発生を想定して、荒茶の保管場所等には十分注意すること。

<事後対策>

1 茶園管理

- (1) 大雨により表土が流れて根が露出している新植園等では、早急に土寄せを行い、敷きワラ等で根を保護する。また、大雨で溝ができているところでは、流れを分散して溝が大きくなるのを防ぐ。
- (2) 長雨により肥料成分の流亡が考えられるため、適正な施肥を実施し、秋芽や翌年の一番茶の母葉となる枝条の充実を図る。

2 製茶工場

雨漏りや浸水等により汚損した個所は、製茶前に水道水で洗浄・消毒等を行い、清潔に保つよう心掛ける。

< いぐさ >

<事前対策>

- 1 6月はいぐさの伸長期で、浅水湛水を保つ必要がある。深水状態が長く続くと茎の元白が発生しやすいので、長期間深水とならないような排水対策が必要である。
- 2 納屋及びいぐさ乾燥室の雨漏りは、乾燥したいぐさが濡れて変色等の品質低下の原因となるので、雨漏り箇所の補修を行う。ただし、補修作業は天候の回復を待って行い転落等の事故がないように注意する。
- 3 収穫時期に長雨でほ場が冠水する場合は、収穫時に出るいぐさ屑や抜き取った杭等がほ場外へ流出することがあるので、不要な杭等はほ場から撤去する。

<事後対策>

- 1 排水対策
いぐさの葉鞘（はかま）から上の部位が長時間冠水すると、茎に泥等の付着や茎の変色が生じやすいため、ほ場の早期排水に努める。
- 2 倒伏防止対策
いぐさの伸長には直立姿勢の維持が重要である。長時間の冠水を避けると共に、倒伏防止網の状況を点検し、いぐさが直立した姿勢を維持できるようにする。いぐさが直立するとほ場内の風通しが改善され紋枯病等の発生抑制にもつながる。ただし、倒伏防止網を上げすぎていぐさが風の影響等で網から抜け落ちないように網の高さには注意する。
- 3 追 肥
長時間冠水したいぐさは生理機能が低下していることが考えられる。そのため、一度に多量の肥料を与えると障害が発生する可能性があるので、分施を行う。止め肥後は、収穫予定日が大幅に遅れない限り追肥は行わない。
- 4 紋枯病対策
ほ場から水が引いたら、7～10日後位を目途にいぐさの株元に紋枯病が発生していないかを確認する。紋枯病が発生した場合は薬剤による防除を適宜行う。
- 5 収 穫
いぐさの根部に汚泥等が付着しているものは、泥染前に根元部分を清水で洗い付着物を除去する。
- 6 保 管
雨漏り等で濡れた原草は、濡れて時間が経っていない場合は、直ちに再乾燥して品質低下を最小限にとどめる。

< 畜 産 >

<事前対策>

飼料作物

飼料作物（特にトウモロコシ）は湿害に弱く、種子の腐敗や生育障害を起こす。また、飼料畑へ作業機械の搬入ができないため、播種や収穫作業が適期に行えず品質を低下させるため、以下の対策を行う。

- 1 排水口の増設等、地表面の排水が容易な圃場状態にしておく。
- 2 圃場に仮置きしているラップサイレージは排水のよい場所に移動する。
- 3 今から播種を行う夏播き飼料作物は、播種後の種子が流れないように鎮圧を十分に行う。
- 4 梅雨の晴れ間で圃場作業ができるように機械のメンテナンスを実施するとともに、消耗部品を準備しておく。

畜舎等施設

畜舎の雨漏り修繕、畜舎周囲の側溝、排水口を清掃する。雨で湿度が上がるので、風の方向や降雨の状態を考慮し、畜舎内の通風、換気に心がける。

- 1 堆肥舎に雨水が浸入し外部に堆肥が流失しない対策を講じるとともに尿汚水の貯留槽への雨水浸入防止対策も合わせて行う。
- 2 運動場等は周囲に排水路を確保し泥ねい化を未然に防ぐとともに、除ふん等、清掃に努める。
- 3 堆肥や汚水等は、長雨等で長期に搬出できない事態に備え、余裕を持った在庫管理に努める。
- 4 ICT 機器等の水に弱い電子機器は、十分な防水対策を施すこと。

家畜の飼養管理

雨のため湿度が高い時期に高温が続けば体熱の放熱が妨げられ、体温が上がり、体力の消耗が大きく、発育や乳、肉、卵の生産に影響する。また、ウイルス、細菌、かび等の微生物が繁殖しやすいため、濃厚飼料等の固形化、かびの発生等による変敗や品質の低下がみられ、摂取した家畜の消化器変調を招き、ひどい場合は栄養障害や中毒症を起こすため、十分な換気や飼料の管理等に努める。

<事後対策>

飼料作物

- 1 冠水を受けた飼料作物は、できるだけ早く表面排水を行い、追肥等を行う。また、生育が進み利用可能な作物については、早めに刈り取りを行いサイレージ化する。
- 2 発芽期及び幼齢期で水害、湿害を受け、その後の生育が不能と判断された場合は、遅播きのトウモロコシ、ソルガム、もしくは湿害に強いヒエ類等を再播種する。
- 3 かん水したラップサイレージについては、損傷の程度を確認し、傷んだものは廃棄し、その他のものも早めに利用する。
- 4 イタリアンライグラスは出穂したら天候を見ながら早めに収穫する。

畜舎等施設

- 1 畜舎への浸水があった場合は排水に努め、水が引いた後に速やかに畜舎、設備器具、飼槽等の消毒を行う。
最初に畜ふんや有機物を除去するため畜舎全体の清掃・水洗を行い、逆性石けん等の消毒薬を散布し十分乾燥させた後に、床や壁に石灰乳を塗布するとより効果的である。
- 2 新鮮で乾燥した敷料と交換する。
- 3 家畜ふん尿処理施設の外に流出したふん尿や堆肥は、速やかに処理する。
- 4 運動場等は排水を促し、雨が上がれば生石灰等で消毒を行う。
- 5 放牧地については、土砂崩れ等の被害が無いことを確認したうえで放牧する。また、土砂崩れ等を確認した場合は、速やかに周囲に進入禁止対策を行い、家畜の安全を確認したうえで放牧する。
- 6 ICT等の機材は雨で濡れて故障していないか動作確認を行う。

家畜の飼養管理

雨のため湿度が高い時期に高温が続けば体熱の放熱が妨げられ、体温が上がり、体力の消耗が大きく、発育や乳、肉、卵の生産に影響する。また、ウイルス、細菌、かび等の微生物が繁殖しやすいため、濃厚飼料等の固形化、かびの発生等による変敗や品質の低下がみられ、摂取した家畜の消化器変調を招き、ひどい場合は栄養障害や中毒症を起こす。

- 1 個体観察を徹底し、疾病の早期発見と治療に努める。
- 2 冠水等によって変質した飼料は廃棄し、飼料タンク内の点検や飼料庫の通風を促す。
- 3 家畜の死亡被害があった時は、速やかに化製処理場に搬入し適切に処理する。

油流出事故の防止対策と油流出事故発生時の初動対応について

1 油流出事故の事例

燃油タンクから農業用ボイラーまでの配管や継ぎ目付近、水抜き弁等の劣化や破損、未使用時期の開閉弁の閉め忘れによるものが多くなっている。また、関係機関への通報が遅れたことで、被害が拡大した事例も見られる。

2 油流出防止対策

- (1) 農業用ボイラー、燃油タンク、防油堤など、所管の消防署の指導に基づき適切に設置する。
- (2) 日頃から定期的に燃油タンクや配管を点検し、破損や劣化等が見られた場合は直ちに修理する。
- (3) 防油堤に溜まった雨水は抜いておき、河川等の増水や強風、地震等により燃油タンクが倒れないようにタンクを固定する。
- (4) タンクから流出した油が防油堤から外へ流出しないよう、止水栓を閉めておく。
- (5) 長期間使用しない場合、流出防止の観点から燃料を使い切り、元栓を閉める。タンク内に燃料が残っている場合でも元栓は必ず閉める。その際は、必ずボイラーのエア抜きコックを開ける（配管内の油温の上昇・膨張により配管を破損する恐れがあるため）。
- (6) 万が一に備えて、各種保険への加入を検討する。

油の流出は、環境に大きな影響を与えるとともに、河川に流出した油の回収費用は原因者の負担となるなど、農業者にとっても大きな負担となるため、十分注意する。

3 油流出発生時の初動対応

- (1) 流出を発見したら速やかに、所管の消防署、市役所又は町村役場、県広域本部（地域振興局）に連絡する。
- (2) 併せて、発生要因（閉め忘れなど）を確認して、すぐに流出を止められる場合は直ちに対応する。
- (3) 排水路、河川、圃場等に流出した場合、周辺の地下水や生活環境への影響を未然に防止するために、流出した油を早急に回収・除去する必要がある。流出した場合の事後対策は、油の種類と流出量、圃場の状態等により対応が異なるため、関係機関の指示に従う。

【圃場（土壌）に流出した場合の対応】

汚染された土壌を除去するのがもっとも確実な方法である。汚染の拡散を最小限にするために、ただちに油で汚染された土壌をビニールシート等の上に掘り上げ、さらに上部を覆うなど、可能な限り飛散・流出防止に努める。対応が遅れると時間の経過とともに汚染が拡散し、処理に係る時間と費用が増大するため迅速に行うこと。